

聖書：ローマ 16：16～20

説教題：平和の神は

日時：2016年10月2日（朝拝）

前は 16 節を残しましたので、今日はそこから始めたいと思います。このローマ書最後の 16 章はカタカナの名前が羅列されていて、一見私たちには無味乾燥な箇所とも思われるところです。しかし実はかえってこういう箇所に当時の教会の生き生きとした姿を垣間見ることができる前回申し上げました。ここに私たちが見るのは、当時の教会の主にある美しい一致と交わりです。神の家族である者たちの親しい愛の挨拶です。その一致と平和を感謝して益々これを尊ぶように！という目的で、最後の 16 節にこの命令があると考えられます。「あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。」

さてこれは文字通り、今日の私たちも実行すべきことなのでしょうか。「口づけをもって挨拶すること」は聖書の時代に一般的に見られるものでした。たとえば旧約聖書で目の見えないイサクが長男エサウを祝福しようとして、実際には弟ヤコブに「わが子よ。近寄って私に口づけしてくれ。」と言う場面があります。また親友であるダビデとヨナタンは別れる時、「口づけして、抱き合って泣いた」と記されています。新約聖書でもイエス様はパリサイ人シモン家で食事をした際、彼が口づけして暖かく迎えてくれなかったと言われました。また放蕩息子の父親は息子が帰って来た時、走り寄って抱き、何度も口づけしました。またパウロと別れを惜しむエペソの長老たちは、使徒の働き 20 章で、パウロの首を抱いて幾度も口づけしたと記されています。このように口づけは当時、親しい家族同士、あるいは特に親しい友達同士の挨拶として一般的に行なわれていたことが分かります。それが主にあって一つの家族・霊の兄弟姉妹へと導かれたクリスチャン同士の挨拶にも用いられるようになったのでしょうか。無論、「聖なる口づけ」と言われていますように、これは性的なものではなく、聖徒たちの聖い交わりを記すものとして行なわれるものです。

さて、この口づけを今日の私たちはどうしたら良いのでしょうか。そのまま私たちの間で行なったら大変なことになるだろうということはすぐ想像がつきます。このパウロの命令を正しく理解するためには「文化」の問題も合わせて考える必要があります。パウロはここで「口づけ」という挨拶をクリスチャンが守るべき永遠のルールとして定め

たのではないと思われます。パウロもある特定の時代に生きていた人であり、その社会の中では、特に親しい人たちの挨拶が口づけによってなされていたから、このように言ったのであって、別の時代、別の文化の下に生きていたら、もっと別の言い方をしていたであろうことは十分に考えられます。たとえばある国では親しい挨拶としてハグします。そういう国にパウロが生きていたら、彼は「聖なる抱擁をもって挨拶しなさい」と言ったでしょう。またある国では握手することがそれにあたります。そこに生きていたらパウロは「聖なる握手をもって」と言ったかもしれません。私たちの日本においては伝統的には肉体的な接触は好まず、一步離れてお辞儀するというのが一般的と思われます。パウロはその場合、「聖なるおじきをもって」と言ったかどうかは分かりませんが、——それではちょっと意味が弱いように思いますが、——いずれにしろ、私たちはこのような時代の違い、地域の違い、文化の違いを考慮に入れる必要があります。聖書は神の言葉だから従わなければならないと言って、ただ実行するのはナイーブな考えです。しかし大切なことは、ではどのようにしたら私たちはこのパウロが言わんとしたことを今日、積極的な仕方でも実践できるだろうかと考えることではないでしょうか。

この箇所を読む際の一番の危険は、これは紀元1世紀の習慣に過ぎないと言って切り捨て、そのままにしてしまうことです。しかし口づけが適切でないなら、何をもって私たちはこのことを表し合うべきなのか。パウロが間違いなく言っていることの一つは、クリスチャンはお互いに会う時、心からの挨拶をし合うべきであるということでしょう。お互い会っても知らんぷりしたり、声もかけなかったり、あるいは声をかけてもらってもツンとしているようであってはならない。そうではなく、互いに主にある家族であることを示し合う、暖かく、いのちの通う、パーソナルな挨拶をし合うようにということでしょう。前に長老教会からの問安使として韓国の教会に行った時に印象深かったことの一つは、クリスチャンが互いに会う時は本当にこのことを示し合っていたことです。とにかく皆がよく握手して、お互いの交わりを喜び合う。釜山の中会会議に出席した時も、お客さんである私たちに人々がそうしてくれるのは分かるのですが、そこに集まっていた人たちがとにかくあちこちで握手しながら愛を表し合って挨拶している。そうしていない人はどこにもいない。まるで握手会の会場に来たかのようなようでした。日本の中会大会とは何と異なる光景かと圧倒され、衝撃を受けました。確かにその韓国と全く同じことをすることが適切であるとは思いません。では私たちはどうすべきなのでしょう。先に触れましたように、日本人は肉体的接触をあまり好みません。特別な時に握手をすることは受け入れることができ、また嬉しいことであっても、会うたびに毎回握手とな

ると抵抗のある人も多いでしょう。第一、普通の家族関係でもそのような接触をしていないのに、神の家族になったからと言って突然そうすることには違和感がある。しかしそのような肉体的接触がなくても、私たちは互いに会った時、主にある親しさをもって心のこもった挨拶を心がけることはできるのではないのでしょうか。その声のトーンによって、その表情によって、相手を気遣い、安否を互いに問うことによって、お互いへの愛を示し合うことは十分にできることではないのでしょうか。もちろん外側への現わし方にばかり注意すれば良いのでは在りません。何よりも私たちが、主が導き入れて下さった一致と交わりを心から感謝し、尊ぶところから、この交わりを一層促進し、喜ぶための実践へと導かれて行くべきではないのでしょうか。

パウロはその後で「キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています。」と言います。パウロは異邦人の使徒として、異邦人教会を代表してこのように言えたということかもしれません。あるいはこの時は異邦人教会からの献金をエルサレムへ運ぼうとしていましたが、各教会からの代表使節がこの時のパウロとともにいたことが、使徒の働き 20 章から分かります。その彼らからの実際の挨拶だったとも考えられます。パウロはここでこのように述べてローマのクリスチャンたちに、主にある広い交わりを思い起こさせています。主が導き入れてくださった交わりは目の前の人たちとの間にだけあるものではないのです。それは全世界に広がっているものです。そういう交わりに私たちは生かされています。この神のみわざを喜び、尊んで、益々この祝福を大切に、楽しむように、とパウロはこの言葉を語っていたのではないのでしょうか。

さて、このような美しい挨拶の後、17 節からは一転して厳しい調子の言葉が出て来ます。分裂とつまずきを引き起こす人たちについての警告です。なぜ手紙の終わりの方に、こんな言葉が出てくるのでしょうか。それはこの人たちが、今見た主にある一致と平和をぶち壊す人たちだからでしょう。具体的にこの人々がどんな人たちだったかは、この箇所からだけでは分かりません。ただ 17 節に「あなたがたの学んだ教えにそむいて」とあることから、新奇な教えを主張した人たちであっただろうと考えられます。大事な原則は、使徒たちの教えにしっかりとどまること。イエス・キリストによって使徒に任命された人たちの教えこそ、主の教会が拠って立つ土台です。それと違うことを教えようとする人たちには注意しなければならない。

その人たちについて、18 節に「私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えて

いる」とあります。「欲」という言葉には印が付いていて、欄外の 18 を見ますと、直訳で「腹」とあります。自分の腹に仕える、すなわち自分の名声、野心、業績、満足、また経済的収入のためにそのことをしている。そして人を動かすことに長けているそういう人々の言葉は、たいていなめらかで流暢。またへつらうのが上手。人をうまくほめ、持ち上げる。そのため、純朴な人ほどコロッと引っかかる。

パウロはこのような人々をよく警戒せよ！また彼らから遠ざかりなさい、と言います。19 節でパウロはローマのクリスチャンたちの従順を賞賛していますが、そのあまり、何でも受け入れることがないように！と述べています。そして「私は、あなたがたが善にはさどく、悪にはうとくあってほしい」と言っています。ある人はここを「善においてはエキスパートであるように！そして悪においてはビギナーでさえないように！」と意識しています。それはどんなものか、ちょっと関わってみようとビギナーになり始めると罠にはまってしまう。だから悪の誘いには乗らないということです。分裂とつまずきを引き起こす動きには関わらないし、付いて行かない。

教会はしばしばこのようにして平和をかき乱され、悩まされるものですが、そんな私たちにとって素晴らしい約束が 20 節にあります。20 節前半：「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。」ここから教えられることは、私たちは実は宇宙的な戦いの中に引き込まれているということです。私たちは今、分裂とつまずきを起こす人たちについての警告を聞きましたが、その背後にいる真の敵はサタンであるということです。ただ人間世界の話ではないのです。この世界の歴史は一言で言えば神とサタンの戦いであって、私たちはキリストにあって神の子どもとされ、サタンと戦っているということです。この 20 節の言葉はあの創世記 3 章 15 節を私たちに思い起こさせます。エデンの園でアダムとエバが罪を犯した直後、神はやがてキリストを送ってくださり、そのキリストが蛇の頭、すなわちサタンを踏み砕くと宣言されました。まさに歴史全体をかけて今なお神とサタンの宇宙的な戦いが行われているのです。果たしてそんな中でこの御言葉は私たちに何を約束しているのでしょうか。

まずパウロが言っていることは、神がサタンを踏み砕くということです。勝利は確実。最後は決まっている。神が敗北することはありません。神が取り戻そうとしている一致と平和を壊そうとするサタンの企ては最終的に失敗に終わる。しかし私たちにとってのチャレンジは、ここで「あなたがたの足で」神は踏み砕くと言われていることでしょう。

創世記 3 章 15 節では「キリストが踏み砕く」と言われていました。そしてそれは確かにそうです。キリストは地上のわざを成し遂げ、十字架と復活によってサタンの敗北を決定的なものにしました。しかし今やキリストに結ばれた私たちも、サタンの完全な敗北に至るプロセスに関わる者とされています。具体的な日々の信仰生活で、私たちが 16～19 節で見たパウロの勧めに従う時、実は私たちはキリストとともに悪魔の企てを打ち壊し、サタン自身を踏み砕くわざに参加しているのです。神はキリストにある私たちを用いてそのことを進めて行かれるのです。

そしてそのように導く神が、ここで「平和の神は」と言われています。私たちの神は、まさに平和の神です。平和はこの方から流れ出ます。この方こそ平和を求めてくださる方、この世界にそれを作り出される方、そしてその最終状態を必ず実現される方です。この平和の神によって、神のご性質と一致した平和は必ず取り戻されるというビジョンを正しく掲げる時こそ、私たちは力と勇気を得て、そのゴールに向かう歩みと戦いをなすことができるのではないのでしょうか。そのことを見据えつつ、パウロは 20 節の最後で「どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように」と日々の戦いのためのさらなる恵みを祈っています。

この世にあって罪のために分裂、仲違い、不一致、混乱に悩む私たち。しかし聖書が語るグッド・ニュースは、平和の神がおられるので、最後は必ず究極的平和が実現するということです。神はそのゴールを一人で達成されるのではなく、キリストにある私たちを用いてなさります。一人一人の歩みには永遠に価値が残る宇宙論的な大きな意義があるのです。そのことをわきまえて身と心を引き締められて、分裂やつまずきを起す人々を警戒し、関わらない者でありたい。そして神が作り始めている、キリストにある真の一致と平和を何よりも喜び、尊ぶ者でありますように。それゆえ、お互いの挨拶の仕方にそのことを象徴的に表すことができますように。そしてイエス様とともに、サタンを踏み砕く者とさせていただいて、平和の御国が最終的に実現する日に向かって戦いをなし、またこの恵みを人々に宣べ伝え、この恵みに人々を招く主の教会の幸いと使命に歩みたいと思います。